9 月講演会の報告

～サーカスの新世紀を目指す木下大サーカス～

9 月 8 日、ルナ・ホールにて木下サーカス株式会社・木下唯志社長による「サーカスの新世紀を目指す木下大サーカス」と題しての講演がありました。参加者数は 129 名、担当は企画Ｇでした。講演の要旨は次のとおりです。

木下サーカスの歴史と人物

皆さん、こんにちは。久しぶりに芦屋に来ました。私の次男は芦屋の大学に通っており、長男は別の大学ですが、私は東京の大学出身です。このように素晴らしい芦屋の地で講演させていただき、嬉しく思います。

早速ですが、木下サーカスをご覧になったことがない方もいらっしゃると思いますので、**最新の木下サーカスの映像**を 2、3 分でご覧いただき、その後 120 年以上の歴史を紐解きながらお話ししたいと思います。

この写真は、私の祖父である初代・木下唯助です。20 歳の頃に、日清戦争で日本が勝利し、大陸（中国）で興行を始めました。現在、舞台で活躍しているジャグリングやハンドスタンドのアーティストのほとんどは、私が審査員を務めていたモナコの世界サーカス大会などで毎年スカウトしています。この大会の総裁は、モナコ公国のステファニー公女です。ロシアとウクライナの関係で、現在はロシアのチームは来ていませんが、以前はウクライナやロシアのモスクワ、レニングラード（現サンクトペテルブルク）などにあるサーカス学校の出身者が多数いました。チェコやポーランドなどの東欧諸国には国立のサーカス学校や劇場があり、エージェントを通したり直接交渉したりして、素晴らしいアーティストを呼んでいます。ですから、皆さんが 10 年、20 年、30 年前にご覧になったサーカスとは、かなり進化していると思います。

祖父と父、そして私

この絵は、祖父が自ら描いたものです。祖父は絵や書が非常に上手で、その作品は代々残されています。祖父は軍馬の調教が非常に有名で、木下曲馬団がスタートしました。お気に入りの馬の名前が「金馬」だったため、「金馬館」という常設劇場も作りました。

また、ドイツのハーゲンベックサーカス（現ハーゲンベック動物

園）は大きな船で 100 頭ほどの動物を連れて、神戸、横浜、博多を巡業しました。神戸でハーゲンベックのサーカスを見た祖父は、神戸の川島商会を通じて多くの動物を仕入れ、全国各地で興行を行いました。昭和 10 年には、「東洋のハーゲンベック猛獣大サーカス」と銘打って、丸太で組んだ大きな劇場で興行を行いました。昭和 12 年に日中戦争が始まると、食料が少なくなり、祖父は名古屋の東山動物園に象 4 頭を寄贈しました。

私の父光三は、昭和 12 年には特務機関員として北支（中国北部）の戦地へ出征しました。父は、昭和 16 年に母と結婚し、中国で銃弾に打たれ、負傷して先に帰還することになり、母は敗戦後、天津からの引き揚げ船に乗れず、約 1 年間、二人の赤ん坊を抱いて饅頭（マントウ）を作り行商をして苦しい生活をしたそうです。昭和 24 年、戦後 4 年後に父は 2 代目としてサーカスの経営を引き継ぎました。父は大阪の大きな薬問屋の三男で、日本大学の法学部を卒業しました。父の兄は京都師範の校長でもあったので、私の身体には教育者の血と興行師の血が半々で流れていると言えます。父は、戦争当時、東大のトップクラスの人々と戦友だったので、戦後、東南アジア諸国で民間外交に尽力しました。たとえば、フィリピンでは当時のマグサイサイ大統領と協力して、子供病院への寄付活動も行いました。

仏門への思いと剣道

この写真は、4 歳の頃の私です。コリーという名前の、とても優しいチンパンジーと一緒でした。現在、チンパンジーやゴリラ、象などの野生動物はワシントン条約で輸入が禁止されています。岡山には、動物の特別なお墓があり、毎年 11 月には供養を行っています。実は、中学 1 年生の頃、私は人生の無常を感じ、仏門に入ろうと思って姉に相談しましたが、入門への道を教えてくれず、悶々とする中、高校受験となり、その後、岡山操山高校に進学し、柔道部に入りました。父に「男は武道をやれ」と言われていたからです。高校 2 年生の時、サーカスが海外に行くことになり、私も 3 ヶ月休学して行く予定でしたが、直前でキャンセルになり、父のアドバイスによりその 3 ヶ月間はサーカス会場の横浜と千葉の公演を手伝うことになりました。

当時の横浜市長は、明治大学出身の飛鳥田一雄先生で、非常に尊敬できる方でした。私は昭和 44 年に偶然にも明治大学に入学しました。当時は東大紛争で東大の入試が中止になっていた頃でした。慶應義塾大学の法学部も受験し、一次試験は合格しましたが、二次試験の論文「目的と手段について」で合格できなかったのですが、幸いにも 50 倍であった明治大学経営学部へ入学することができました。大学では体育会剣道部に入りました。最初は初心者でしたが、熱心に稽古に励み、2 年生で二段、3 年生で三段を取得しました。剣道の稽古を通して、私は警視庁の主席師範

でもある森島健男師範の「一日一死」の言葉と「後世に何を残すことができるか」という哲学者内村鑑三翁の言葉に感銘を受けました。

経営と人生観の変化

私は、内村鑑三氏の「後世への最大遺物」を読んで、財産や事業を残すのではなく、自分の品格や人格を磨き、勇ましく高尚な生涯を送ることを基本に、後進への教育は努力すれば誰にでもできる後世に残せるものだと考えるようになりました。この考えが、私の人生観を大きく変えました。また、奈良の断食道場「信貴山道場」で 3 年間にわたり修行しました。空中ブランコの落下に失敗して第七頚椎圧迫骨折をして、その上マイコプラズマ大葉性肺炎にかかり、39 度以上の熱が 10 日間続き全ての粘膜がただれ、あと 1 日熱が下がらなければ死に至っていました。その後 6 ヶ月間の入院のあと微熱が続き自宅療養をする中、偶然にも健康雑誌「壮快」を読み信貴山断食道場へ行く機会を得て、断食修行をする幸運に恵まれました。断食修行で 60kg の体重が 50kg になり、断食と食事療法、そして精神的な教えによって 3 年後に驚く程回復しました。断食道場の吉田修先生からは、幸福になるためには「感謝し、奉仕し、喜び通すこと」また「腹を立てない、人の悪口を言わない、感謝し合う」という教えを学びました。

サーカス経営の苦難と再起

1981 年の神戸ポートピア博覧会では、海外本部長として海外のアーティストを招聘しました。1986 年には、モントリオールでカナダのシルク・ドゥ・ソレイユの創業者であるギー・ラリベルティと出会い、彼から刺激を受けました。しかし、1990 年に 3 代目社長兄光宣が倒れ、10 億円の負債を抱えるという大変な状況になりました。周囲からはサーカスをやめるように言われましたが、剣道部時代に教えられた「絶対に諦めない」という闘志が湧き上がり、私が 4 代目として経営を引き継ぐ決意をしました。その年の姫路城の大手前公園での公演では、地下駐車場があるためテント設営が困難でしたが、父の助言に従い、多くの難関と苦労を乗り越えて公演を成功させました。

その後、海外のサーカスを直接見に行き、アメリカのボストンで観た「世界一の混成猛獣ショー」を初めて導入しました。テントも一新し、ヨーロッパ最大のテント会社から導入しました。阪神・淡路大震災の際には、被災者の方々を無料で招待し、8 万人の方々にご覧いただきました。

新たな挑戦

ワシントン条約により象の輸入ができなくなったため、タイのゾウ病院を支援する活動を始めました。これは、素晴らしい思い出づくりが私たちの使命であるという考えに基づいています。

2011 年には、モナコ国際サーカスフェスティバルの審査員に選ばれ、世界中の超一流のサーカスエンターテインメント専門家たちと一緒に審査をしました。そして 2015 年には、アジア人で初めて「世界サーカス連盟の大使」に任命されました。モンテカルロ国際サーカスフェスティバル

での金メダル獲得など、世界一を目指す挑戦を続けており、海外の優れたアーティストを招へいすることで常に進化を追求しております。

2021 年にはイタリアからフェラーリのテントを輸入し、より良い興行を目指しています。4 年前の豊川市で公演した際のご縁で、2 年前の水害に見舞われ、その支援金を寄付することで地元の皆様に大変感謝していただきました。

また、コロナ禍の中の 2021 年には MISIA さんに特別のご縁で観覧にお越し戴き「ワクワクしたり、ドキドキしたり、笑い合ったり、夢を見たりすることは、人が生きる上で必要なもの」という温かいメッセージをいただきました。

南日本新聞社の佐潟隆一社長からは、不安な時こそ「挑戦する勇気と、人の限りない可能性や夢、希望を感動的に見せてくれるサーカスの存在意義は大きい」というお言葉をいただきました。

「If We Hold on Together」というダイアナ・ロスさんの歌のように、力を合わせればどんな困難にも立ち向かえるという思いを大切にしています。松下幸之助さんの「自ら断崖絶壁の淵にたて。その時はじめて新たなる風は必ず吹く。」という言葉も、私の支えとなっています。

2017 年には、熊本の地震で被災した方々を励ますために、熊本での公演も行いました。今後も「一日一死」、「一日一生」の言葉を胸に常に進化し続け、大衆と共に歩み、世界一の魂の集団を目指してゆきたいと思います。

現在は名古屋で公演中ですが、また機会があれば芦屋でも公演したいと思いますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

――――――質疑応答――――――

質問 1

質問というよりも、今日のお話を楽しみに来ました。私も木下さんと同じ大学の同期で政経学部にいました。昭和 44 年の入学で 1 年留年しました。私は「猛烈社員」と言われた時代に、家族を神戸に置きながら、横浜、東京、大阪と転々とし、60 歳近くまで仕事一筋の人生でした。木下さんの生きてこられた世界とは全く違います。これだけ素晴らしい人生を送っておられることに感動しました。

――――――大学時代は本当に地獄のような世界でしたが、そういう経験があったからこそ、3 年間の自宅療養をしていた時に素晴らしい師に出会えました。それが一番大きかったです。森島健男先生からの教え「一日一死」、今日一日を真剣に生き抜くこと。そして、素晴らしい出会いがあったとしても、それを求めていなければ通り過ぎてしまうということです。私は健康年齢で 39 歳、実年齢掛ける 0.5、その気概で頑張っています。お互い同期ですのでこれからです。どうぞよ

ろしくお願いいたします。

質問 2

私は芦屋のために頑張っている者です。本日は木下サーカスさんのお話を聞き、ぜひ文化都市である芦屋を木下サーカスさんにも支援していただきたいと思いました。もちろん、芦屋市も一生懸命頑張ります。小さい場所ですが、様々な場所があると思いますので、そこでまた木下さんの素晴らしいサーカスを見せていただきたいと思います。

――――――承知いたしました。ありがとうございます。

質問 3

木下サーカスはものすごい規模です。例えば前回公演の北九州から名古屋までどのように移動しているのか非常に興味があります。また、3 か月ごとに移動するとのことですが、団員はどのような生活を送っているのか、住まいや子供さんのことなど教えて下さい。

――――――私がサーカスに入社した当時、365 日休みはありませんでした。入社する時は、実は三和銀行と住友銀行から内定をもらっていましたが、家族会議で実家に戻ってきてほしいと言われ、銀行の内定を辞退し、家業を継ぐことにしました。

その当時は、サーカスの宿舎は丸太とテントとベニヤ板でできていました。これは良くないと思い、兄と話し合い、現在はコンテナを改造した宿舎を使っています。1 つに約 1000 万円をかけて、シャワーやトイレも全て完備しています。今では宿舎だけで 30 台、大テント、動物舎や全ての機材を含めると 100 台になります。独身者は 1/3、家族は 1/2 または 1 台を使えるようにしています。これはロンカリーサーカスを参考に、約 45 年前に兄と立てたロンカリー計画です。若い団員もたくさん入ってきており、宿舎が足りないくらいです。

移動については、当時は丸太などを運ぶトラックが 35 台ほどでしたが、今は 100 台にもなりました。象もラオスから特別な飛行機で輸送します。象 8 頭を航空貨物で輸送しようとした際、出発前に飛行機に乗せるオリを壊してしまったことがあります。幸い、飛行機に乗る前だったので大惨事を免れましたが、3000 万円の航空貨物運賃もフイになりました。そういった経験を経て、現在は日本の航空会社の協力のもと、頑丈なオリを日本で作り、象を安全に輸送しています。以前は船で輸送することもありましたが、今は飛行機が主です。

輸送の関係ですが、今はトラックが 100 台あります。また、最近では労働基準法の問題もあり、移動距離を短くしたいと考えています。しかし、公演場所となる広い土地を探すのが大変なのが現状です。

うちにキリンがいました。7m のキリンをどのようにして移動したと思いますか。低床のトレーラーの車高は 0.6m、いわゆる道路交通法では 3.8m。弊社のキリンは、お座りというとお座りをするのですね。犬のように伏せをすると首が長いので、ぐうっと背中まで首を曲げるんですね。そのキリン君は後年、加齢で体調も不安になってきていました。まだ元気なうちに東北サファリの方に寄贈しました。東北サファリさんのメスと老後は非常に仲良く過ごしていただいたということです。

今年は名古屋でも気温 42 度の猛暑が続いていますが、冷却装置はデンソーとダイキンの冷房の

機械を組み合わせ、1 台が 1500 万円するエアコンを 8 台設置しました。さらに大テントの屋外に設置したスプリンクラーで水をかける仕組みも考案しました。
この「改革改善」の取り組みは、宮崎の平和リース会長である松田氏から学んだ教えを実践したものです。松田会長は 19 歳で宮崎に渡り、平和リースという会社を立ち上げ、現在は 82 歳だそうです。毎年 10 億円の土地を購入するのが趣味で、宮崎ではナンバーワンの土地持ちだといいます。本社屋はプレハブですが、全てがコンピューターで管理されており、事務員は 2、3 人しかいません。経理担当は毎月交代し、辞めたい人は辞めてもいいという考え方です。「三歩以上は駆け足」が基本理念で、年末にはシーガイアで約 1000 名を招待する盛大なパーティーを開き、畳を何百畳も敷いてお客様をもてなすそうです。私はこのような松田会長の「改革改善」の教えを、私どもの社員たちにも伝え、共に学び世界一を目指して精進してゆきたいと思っております。

（広報 G　兵東勇記）

木下唯志社長

司会の越智会長

質疑応答